

ジェントルマンとは何ものか

— 英国の紳士教育から学ぶ —

筑波大学大学院教授 安川哲夫



いわゆる「英国紳士」については、われわれ日本人は比較的身近に感じている。しかし、分かっているようでなかなか正体、本質は見えてこない。時代に応じた顔がいくつもあるからだ。現代では一定の行動様式をとりさえすれば、誰でもがジェントルマンと呼ばれるまでになっている。

ジェントルマンとは一体何ものなのか。それを理解するための手がかりを、ジェントルマン理想とそれと密接に結びついた教育様式の変化に求め、「英国紳士」を成り立たせている構成要素を歴史から探っていくというのが、ここでの課題である。

1. ジェントルマン— 一般的特徴 —

『オックスフォード英語辞典』（OED）によれば、〈gentleman〉という言葉は高貴な身分の人を表すラテン語に由来し、フランス語〈gentil homme〉を経由してイギリスに導入された。英語では二音節の時にはだいたい第一音節にアクセントがくるため〈gentle〉となるそうだが、その語が文献に最初に表れた年をOEDは1275年としている。「良家に属する、生まれのよい、家柄のよい、礼儀作法が良い」というのが本来の意味だが、16世紀になると「寛大な、優しい、穏やかな」という内容を表す言葉となっていく。この力点変化とともに、

この時期、〈gentleman〉という言葉はもう一つ大きな変化を経験する。社会的身分を示す言葉として使用され始めるのだ。公文書への登場は15世紀に入ってからで、16世紀以降その使用が定着していく。

貴族（noble／nobility）とジェントリ（gentry）がジェントルマン身分を構成している。貴族は公、侯、伯、子、男の爵位所持者で、「ロード（卿）」の称号をもって呼ばれる。

ジェントリは身分的には平民だが紋章が許され、バロネット、ナイト、エスクワイア、ジェントルマンの4つの階層から成る。バロネットは1611年にジェームズ1世が創設した新しい身分で、准男爵と呼ばれる。ナイトおよびエ

スクワイアは中世の騎士身分とその従者の末裔で、最後のジェントルマンは、広義のジェントルマンと区別するため「単なるジェントルマン」と呼ばれる。

貴族・ジェントリは田園部に一定規模以上の土地と邸宅を所有しており、農地貸付けによる地代で生活している。地方統治の中心をなす治安判事が、彼らがその力をもっとも良く発揮できた仕事であった。

無給の役職である治安判事には警察権力がなかったため、貴族・ジェントリは日常発生する訴訟を手際よく解決し、信望や名声、教養をもって地域住民の恭順を獲得しておく必要があった。

ここから「名望家支配」と称されるイギリス独特の支配様式が確立されてくるけれども、生活のために働かないことがジェントルマンの証ともされたので、一方で怠惰を地位の象徴とし、他方で商売を嫌悪する独自の心性が生まれてくる。

2. 中世の騎士——紳士の起源・

原型——

英国紳士の起源、原型は中世の騎士にある。ノルマン・コンクエスト（1066年）にまで遡ることができる彼ら騎士

たちは、平時は各自の所領で領主として政治を行い、戦争が始まれば率先して戦場にかけて、国王の名誉と尊敬を守ることを第一の任務とした。よく知られているように、中世騎士道の形成にはアーサー王伝説が密接に結びついている。

イングランドではこのアーサー王に対する関心は、王位継承を主張してフランスに宣戦布告したエドワード3世（1312〜77）が、円卓の騎士にならって「ガーター騎士団」を創設したことで一気に高まった。

またそのきっかけとなった俗説——帰国後の戦勝パーティーで一人の美しい婦人が靴下留めを落とした。周りの人々はそれを見て笑ったが、国王は靴下留めを拾い上げて自身の左脚に結び、フランス語で「思い邪なる者に災いあれ」（*Hon soit qui mal y pense*）と言って窮地の婦人を救ったというエピソード——によって、貴婦人に対する奉仕は騎士道的美徳のひとつとして定着した。

騎士＝ジェントルマンの考えは、百年戦争時のアジャンクール（アジンコート）の戦い（1415年）に大勝したヘンリー5世で決定的となった。彼が戦闘前夜に行った「聖クリスピンの日の演説」——「今日、私とともに血を流すも

のは、私の兄弟となる。いかに卑しい身分のものも、今日からは貴族と同列になるのだ」——は、200年後に書かれたシェイクスピアの史劇で後生に広く知れ渡り、ヘンリー5世はイギリス騎士道の手本とされた。

だがこの間、ジェントルマンのあり方を問う動きも台頭してきた。リチャード2世在位の時、政権は戦費調達のために人頭税の導入を図るけれども、増税に反対する農民たちは1381年反乱（ワット・タイラーの乱）を起こす。このとき農民たちの精神的指導者であった牧師ジョン・ボールは、「アダムが耕し、イヴが紡いでいたとき、いったい誰がジェントルマンであったのか」と問いかけ、特権身分の存在に疑問をぶつけた。

これほど直接的ではないにしても、チョーサーの『カンタベリー物語』（14世紀末）もまた、完全な騎士に、良き戦士という条件に加えて、弱者（たとえば女性）に対して礼儀正しく、敗れた者、貧しい者、不幸な者に対して寛大な態度をとって思いやりを示し、何か人の役に立つことを行動で示すことを求めた。

折しもこの時代、上流階層の間で教育機関を創設して貧しい人々に利益を与えようとする動きが現れる。たとえば、

ウィンチェスターの司教ウィッカムのウィリアムは、1382年、同地に古典語の文法を学ぶカレッジを設立して「貧しい、欠乏した学生」を教え、またその卒業生のためにオックスフォード大学にニュー・カレッジを設けた。

学校の創設はヘンリー6世とその王妃によっても担われ、1440年にイートン校が、そしてケンブリッジ大学にキングス・カレッジとクイーンズ・カレッジが設けられた。

ジェントルマンという言葉は、こうして、騎士身分を指すものから道徳的行為の基準を示すものへとシフトし、やがて紳士と称されて馴染みのある人間類型を生み出してくるのだが、これに最も大きな影響を与えたのは、絶対主義国家の成立と人文主義教育の普及であった。

3. 騎士から紳士へ

歴史の上ではヘンリー7世（在位…1485～1508）の即位をもってテューダー絶対王政の開始とされているが、この時代はドラスティックに支配階層が大きな変更を被った時期にあたった。かつての有力貴族はバラ戦争（1



イートン校

455～85）の過程で消滅し、それまで自立的な軍事的政治的権力をふるってきた地方の封建貴族も、ヘンリー8世（在位…1500～47）の王権強化政策によって「領主」から「地主」へとその性格を変えていく。長年続いた中世のマナ（荘園）領主体制はこうして解体され、これに伴って中世の騎士道倫理も次第に衰退していく。

これに代わって登場した宮廷社交界

は、騎士道の「礼節」(courtesy)とは異なる新しい行為規範を求めた。宮廷では誰もが他者に依存し、かつ国王に依拠していたため、宮廷に出入りする者は絶えず自分の身分や宮廷での序列に依じて行動様式を調整しなければならなかったからである。

こうした要求にこたえて「礼儀」(civility)という概念で新しいモデルを提供していったのは、イタリアの貴族や人文主義者たちが著した礼儀作法書であった。カステイリオーネの『宮廷人』（1528年）やエラスムスの『少年礼儀作法論』（1530年）は、貴族の礼法指南書として大ベストセラーになった。

絶対君主制の勝利した国家は、支配を中央集権化するために多くの司法・行政の機関を設け、その業務執行のために行政能力に秀でた官吏を数多く必要とした。折しも、英語で書かれたサー・トーマス・エリオットの『為政者論』（1531年）は、古典を中心とした「新学問」を教育内容として掲げながら、その書の最後で地方のジェントルマンにこう訴えた。

「子弟を将来為政者に仕立てたい、あるいは公共の福祉を司るならんらかの要職に就かせたいと願う読者諸兄は、この書

に明記されているような方式で子弟を養育し教育しさえすれば、そのとき、その子弟は権威、名譽、高貴の地位にふさわしい人物として万人に認められるであろう」と。

エリオットの「教養ある為政者」理想は浸透した。1550年代から60年代にかけて、19世紀に大ブリック・スクールとして名を轟かせていくことになる文法学校が続々と設立され、ジェントルマンの親たちも子どもたちを学校に通わせ始める。イートン校とウエストミンスター校は貴族にとくに評判の良い学校であった。大学や「第三の大学」と呼ばれる法学院もジェントルマン層の著しい進出を見た。

大学の入学登録簿はエリザベス朝初期に驚くような割合でジェントルマンが増大していったことを示している。中央集権の巨大な官僚組織を担い、中央や地方において新しい支配者となっていたのは、学校で教育を受けたこうした人々たちであった。

なお、一、二付言しておけば、ジェントルマンの親

たちは子どもたちを学校に送るだけで満足しなかった。彼らは自分たちの子どもには貧民子弟の学生とは異なる独自の扱いを求めた。

学校側もこれに積極的に応じ、たとえばオックスフォードでは、高度な学問的教養を願う者には、教科毎にカレッジ・レクチャーを指名し、また子どもを道徳的に監視しておきたいという要望には、若いフェローを彼らの教師および保護者として当てた。

後にチュートリアル・システムとして有名になる制度がこうして誕生する。大学はさらに別途に規則を設けて、トランプ、サイコロ、決闘などを禁じ、また外界の誘惑から学生を保護するために校舎



「忠実な召使い」のエンブレム

の周囲に高い壁を築き、校門をロックするなどした。

イギリス最古の文法学校であるウィンチェスター・カレッジに、ウィンザー城の召使いが着る青の制服をはおって頭にカツラをつけ、豚の顔をして、耳はロバで、口には錠前がかけられている「忠実な召使い」(The Trusty Servant)の肖像画(図参照)が登場してくるのも、この時代であった(最初の記録は1960年)。

絵の両脇にはラテン語と英語の詩が添えられており、それによれば、豚の鼻は出されたものは何でも食する順応性を、口の錠前は秘密の厳守を、ロバの耳は主人の怒りや批判に聞き入る忍耐強さを、牡鹿の脚はすぐに行動する迅速さを、開かれた右手は誠実さを、左手の道具はすぐに仕事に就き働くことを、上着のベストは気が利いた人間であることを、剣と盾の着用は外敵からわが身と主人を守ることを示している。

絵の左上には学校の紋章が描かれていて、上部にはウィッカムのウィリアムの司教冠(ミトレ)が載っている。紋章を取り囲んだ帯にはガーター勲章のモットーとなったフランス語の銘(前述)が刻まれており、その外周には白地の帯に



ウィンチェスター・カレッジの紋章

英語で「マナーが人間を作る」(Manners maketh man)が記されている。

要するに、この豚のエンブレムは、ウィンチェスター校の教育の基本精神とそこで形成される理想的人間像を謳っているのである。

ところで、ジェントルマンが学問を求めていけばいくほど、皮肉なことに、nobilityやgentilityに占めるその価値は下がっていった。一定程度の才能がありさえすれば、学問は誰でもが獲得することができからである。

1595年出版の『ジェントルマン』という作品は、それゆえ、「学問は貴族の根拠というよりもむしろその飾りである。……それが貴族を作るのではない。そこには何かが欠けている」と問題を提

起する。

何がジェントルマンをジェントルマンたらしめるのか。この問題は、低い身分に生まれながらも、徳、機知、勤勉、法律の知識、軍隊での勇敢さなどからジェントルマンと評価される〈Ungentle gentle〉と、貴族の血を引いているにもかかわらず墮落したマナーや教養のなさからジェントルマンではないと

判断される〈Gentle ungentle〉の出現によって、ジェントルマンを規定していた伝統的な価値基準が揺らぎ、また1611年に准男爵が新設されて紋章が乱造されたことで、より深刻化した。

4. 「教養ある為政者」理想からの離反

17世紀前半、右の問題に対して対照的な2つの解答が与えられた。ひとつは、教養理念をさらに発展させて、ジェントルマンを絶対的で完全なる存在にまで教育していくこうとするものであり、もうひとつは、土地所有の確保を第一に考えていこうとするものである。

前者は、ヘンリー・ピーチャムの『完

全なるジェントルマン』(1622年)によって準備され、「ヴァーチュオーソ」理想として完成された。後者は、エリザベス朝末期の代表的な政治家たち、たとえば、バーリー卿ウィリアム・セシルやサー・ウォルター・ローリーが息子たちに残した訓戒や助言などによって先鞭を付けられ、王政復古後にブームとなる。

ピーチャムは、学問を誰も真似のできないようなものにまで「高貴化」趣味化すれば、それによってジェントルマンは誰からもしっかりと見分けられる社会的文化的差異を獲得し、「生まれ良き者と教養ある者という二重の名誉に浴すること」ができると考えた。

当然のことながら、ここで要求される学問は、誰でもがアクセスして立身出世に役立てることができるような学問ではなく、富と余暇のある人によってしか獲得されず、家柄の古さを誇る者にしかその利益が約束されないような学問である。

この観点からとくに推薦されたのは、紋章学や彫刻、碑文、コインなどの古代文物で、これに加えてピーチャムは、高名な貴族や国王の間で当時芽生えていた古代遺物への愛好と収集を踏まえ、海外旅行をジェントルマン教育の重要な一手



ジョン・ロック

段として推奨する。イギリスではこうして18世紀、「グランド・ツアー」と称される大陸周遊旅行が、ジェントルマン教育の総仕上げとして位置づけられ、一大ブームを巻き起こす。

17世紀に現れてきたもう一つの「訓戒・助言」の教育論は、親たちが内乱などの経験から、先祖代々受け継がれてきた土地こそが真に信頼できる基盤であると再確認した結果生み出されてきたものである。土地を失うことはジェントルマンの存在の深みからの危機を意味していた。だから親たちは、いかなる不運にまわれようとも土地は絶対に手放すな、贅沢な生活はやめて節約するようにと絶えず息子に語っていた。

この種の忠告は、友人や妻の選択から、子弟の教育、結婚、出費、所領管理、旅行、宗教に至るまで広範囲に及

び、かつ与えられた指示がきわめて具体的でかつ実用的であるところに大きな特徴があった。かかる観点がやがてジェントルマンに、教養ではなく世間の知恵を、また書物による教育ではなく実例による教育を求めさせていくことになる。

5. 「実務家Ⅱジェントルマン」 理想の台頭

王政復古（1660年）後のイギリス、とくにロンドンには、「消費社会」の到来を告げる高度な消費生活習慣が普及し始めていた。そして、植民地貿易によって財をなした貿易商人や公債等の証券の投資家たち（1694年にイングランド銀行創立）が、ジェントルマン・ライクな生活習慣やその洗練されたマナーからジェントルマンとみなされる「疑似ジェントルマン」が多数出現した。

新旧の思想や価値観が入り交じったこうした混沌とした世界に一つの方向性を示していったのは、『タトラ』や『スペクテイター』といった道徳週刊誌であった。

コーヒールハウスを舞台にしてジャーナリズムが切り開いたその世界を前提に、ジェントルマンに新たな理想と教育の方

法を説いたのは、ジョン・ロックであった。

その『教育論』（1693年）で彼は、ジェントルマン層が再教育されて「実務家（Man of Business）の知識を持ち、その身分に適した立ち居振る舞いを身に付け、そしてその地位に応じて祖国のために卓越した有用な人物となること」で、社会は再び秩序と安寧を取り戻せると説いた。このためにロックは、市民的公共性の圏で形成された「評判法」を指針にして、監督者Ⅱ教師の主要任務は、子どもの虚栄心を利用して、「すぐれた人物や賞賛を受けている人物の行動を愛し、模倣するようにさせる」ことだと力説した。

このリアリズムがその書が国の内外で絶大な人気を博していく要因のひとつでもあったが、18世紀以後も繰り返し再版されていたのは、フランスの翻訳者がここで述べられている「ジェントルマン」はフランスの「ブルジョア」だと見て取ったように、それが市民社会に生きる人間Ⅱ市民の教育論として一定程度の普遍性を持ちあわせていたからにはなかった。

ロックの書と並んで、第4代チェスターフィールド伯爵の『息子への手紙』

(1774年) もジェントルマンの最良の Handbook としてもはやされたが、インパクトとリアリティの度合いから言えば、ロククどころの比ではなかった。

その作品は、高家名門の貴族である父親が、それも枢密院議長をも歴任した政界の大御所が、息子が5歳の時から病気で亡くなる35歳までの長い間、もくもくと書き送った手紙から成り立っていた。その内容は、勉強や友だち選びから始まって、宮中での恋愛術や閨房の指南に至るまでのありとあらゆる処世の術を、自らの経験を踏まえながら、また時には具体的な人物名や事例を挙げながら語って聞かせた生の資料であったからである。

「完全なるジェントルマン、光り輝く人間、宮廷人、ビジネスマンであると同時に遊び上手な人間」であることを説く



チスターフィールドは、「態度は柔和に、事に当たりては毅然として」を社交の黄金律として掲げ、そして息子の教育においては「万事マナーがすべてだ」と言って憚らない。書簡集に込められた伯の考えは、マナーやエチケットを中心にコンパクトにまとめた抄本や抜粋集の類でよりポピュラーになっていったけれども、その奥義はわが国では未だ未解明にあると言っても良いであろう。

ちなみに、100年後に遅れて近代化をスタートさせたわが国も明治8年から12年にかけて『智氏家訓』として3度その抄訳を行い、また近年ではその一部が『わが息子よ、君はどう生きるか』というタイトルで翻訳出版され、話題を呼んだ。

6. 19世紀——「騎士道的ジェントルマン」に向けて

躰やマナーの教育の重視は、子どもの社会化や階層の再生産が社会との直接的な接触によって可能であったことを示している。ところが、こうした状況は産業化の進行とフランス革命の衝撃によって徐々に崩壊していく。代わって、18世紀末から19世紀前半にかけて地方のジェントルマンに城の増築や古い鎧の収集と

いった好古趣味が現れ、ナポレオン戦争におけるネルソン提督やウェリントン将軍の活躍、それに『アーサー王の死』の復刊(1816年)やスコットの『アイバンホー』(1820年)などの騎士道文学の隆盛を見るに至って、騎士道リバイバルが顕著になってくる。1857年に公にされたキングスリーの「筋肉的キリスト教徒」の考えとヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』は、この流れに決定的なインパクトを与えた。

トーマス・アーノルドの徹底した人格教育とラグビー・フットボールは、『トム・ブラウンの学校生活』の舞台となったことで一躍名声が高まった。アーノルドは騎士道精神には時に激しい見方を示したけれども、彼の死後からほどなくしてパブリック・スクールでは名誉の観念を重んずる組織的競技が盛んになり、競技は、個人の勇気や決断力を養うだけでなく、統率力や団結力、また相互信頼と規律をも教えるがゆえに重要であるとされ、人格形成の重要な手段として推進されていく。かくして「パブリック・スクールがジェントルマンを作る」という考えが確立され、1870年あたりからスポーツがカリキュラムに採用されていく。

19世紀の「騎士道的ジェントルマン」

は、道徳的資質を備えた点で中世の騎士道とは異なっていた。と同時に、そこでは「高貴な身分に伴う義務」(noblesse oblige)の遂行が強調されたことで、パブリック・スクールの卒業生たちの多くは自ら進んでクリミア戦争(1853～56)、ボア戦争(1880～81、1899～1902)、第一次世界大戦(1914～18)に従軍し、多くの者が命を落とした。そうした彼らの栄誉と名誉を称えて、イートン校では正面玄関から入ったところの壁に、これまでの戦争で亡くなった卒業生たちの名前が刻まれている。

(7月5日・公開フォーラム)

講師紹介(やすかわ てつお)

1950年 福岡県生まれ
1978年 九州大学教育学研究科
博士課程修了 博士・教
育学 金沢大学教授、ロ
ンドン大学客員研究員な
どを経て、現在 筑波大
学大学院教授

著書『ジェントルマンと近代教育』
(勁草書房1995年) など

2013・8・15の靖国神社スケッチ 編集部

安倍政権の「右傾化」にこのところ近隣諸国の反発が目立つが、そのあおりで、8・15の靖国神社も注目された。300人もの人が身長より長いポールの日の丸を掲げ「海ゆかば」「君が代」を斉唱し、「神門」の金色に輝く菊のご紋章の前ではそろいの迷彩服を着た母子に記念写真のシャッターを頼まれた。母親は毎年来ると言い、息子の迷彩服には「ちびっこ自衛隊」と書かれていた。



親子迷彩服の親子



日の丸斉唱隊